裘山山とその作品について

宮入いずみ

あまり馴染みのない作家ではあるが、最近いろいろな雑誌にその作品が掲載され、しばしば『小説月報』や『中華文学選刊』にも転載される。この作家の作品で最初に読んだのは、「等待星期六」（『中国作家』93-6）である。女性の心理を描写するのがうまく、ユーモアも兼ね備えており、ほかの作品を読んでみたいというが第一印象だった。そのときは「等待星期六」のような作品をたくさん書いているのだろうと思っていたのだが、これまでに発表された作品の多くは大きく二つに分かれそうだ。一つはチベットとそこに駐屯する連隊が登場するもの。もう一つはそれらが登場せず、都会に住む人々の生活の一端を描いたものである。チベットに駐屯する連隊が登場する作品が多いのは、彼女の経歴と深く関わっている。まずは裘山山の経歴について簡単にふれておきたい。

1．裘山山の略歴

裘山山は1958年杭州で生まれる。父は軍人で、幼い頃、両親とともに四川へ移る。高校卒業後、1976年に重慶で解放軍の通信部に所属する。1979年四川師範大学に入り、1983年卒業。その年解放軍の教育指導隊の教官となり、国語を担当する。1986年初めに成都軍区の事務部に配属となる。出版物の編集に従事する。この頃取材のためチベットにも何度か赴く。

この経歴からすれば、軍や兵士を描く作品が多いのもうなずけよう。作品の発表は1984年からで（1978年からという資料もあるが、作家としての実作は84年からと見てよさそうである）、すでに80篇を超える作品がある。

現在は、雑誌『西南軍事文学』の編集部に所属し、副主編として編集を担当。創作活動も引き続き活発に行っている。雑誌に載っている写真を見ると軍服姿なので、軍籍はまだあり、軍人作家といってよいのだろう。作品集は、散文集『女人心情』（四川文芸出版社1992.6）、小説集『裘山山小説精選』（重慶出版社1997.5）、長編小説『在天堂等待你』（解放軍文藝出版社1999.12）などが出版されている。

中国作家作家協会会員。結婚していて、夫と息子が一人の三人家族である。

2．裘山山の作品

先にふれたように裘山山の作品には、チベットに駐屯する連隊が舞台となるものが多い。「寂寞高原」（『解放軍文藝』94-10）をはじめ、「天天都有大月亮」（『人民文学』92-1）、「結婚」（『解放軍文藝』99-7）、「伝説」（『青年文学』2000-2）などがこれに当たる。その一方で、都会生活の中で悩みを抱える女性を描くというのも、裘山山が好んで創作するテーマの一つであるようだ。「等待星期六」、「大街上的女人」（『解放軍文藝』90-3）、「戈蘭小姐的否定之否定」（『上海文学』96-6）、「下午茶」（『長江文藝』99-6）などがそれである。また、数は少ないが、この二つとは全く違ったもの、たとえば「咱們是隣居」（『上海文学』92-11）のように昨今の住宅事情を背景に、まじめにこつこつと研究を続ける学者と金を稼いでよりよい暮らしを求める男の姿を少々こっけいに描いているものがある。この路線ではほかに「本来没事」（『広州文藝』94-2）がある。さらには「廖叔」（『湖南文学』97-2）や、「追溯」（『人民文学』95-9）など文化大革命の悲劇を扱ったものもある。

どちらかといえば、あまり題材は多彩な方ではない。設定される舞台は軍、登場人物は軍関係者と、やや特殊なものが見られる。だが、そこに描かれるものはごくありふれた身近な問題であり、登場人物の感情に無理なく共感することができる。ましてや軍隊を賛美し士気を高めるという意図はほとんど感じられない。

裘山山の作品は、読後に気分が重くなることがない。たとえ悲劇的な話であっても拒否反応を示すようなことはない。そんな後味のよさが裘山山の作品に惹かれる理由なのではないかと思う。

今回は、裘山山の小説世界の一端を担うチベットが舞台となっている作品をいくつか取り上げてみたい。それが彼女の作品の出発点でもあるように思うからである。やや長くなるがここで取り上げる作品の梗概を述べておく。

①「天天都有大月亮」

若雲はチベットのカムバで、国境守備隊の中隊長をしている夫に会いに行く。用事は離婚の手続きを相談するためだった。四年間の結婚生活で、一緒にいた時間はたったの三ヶ月。子どももいない。夫のいない寂しさに、とうとう耐え切れなくなり、離婚を申し出るが、夫は返事を引き延ばし、休暇にも帰って来ず、もう二年余りになる。若雲は夫と話をするために、気候の厳しい冬にもかかわらず、チベットへ向かうのだった。

空港でチベット駐屯部隊の副団長を務める魯連軍と知り合う。休暇を終えた彼は妻に見送られ部隊へ帰るところであった。ロビーで搭乗時間を待っている若雲と目が合った事をきっかけに話をする。魯連軍は若雲に出迎えがないことを知ると、部隊の車に同乗させてくれる。若雲は兄に会いに来たと嘘をついてしまう。

高山病に苦しむ若雲は兄（夫）への連絡を魯連軍に頼んで、彼の部隊の招待所に数日間滞在することになる。その間、魯連軍は何かと親切に面倒を見てくれる。その優しさに次第に惹かれていく若雲であった。魯連軍は若雲に自分のことを話す。今回の帰省は、妻との離婚の話し合いが目的だったが、娘のことで折り合いがつかず中断して帰ってきた。若雲は魯連軍の妻の気持ちを自分の身に置き換えて考える。女が一人で過ごす寂しさをわかっていないと言いかけると、魯連軍は“一人じゃない”と言って若雲の言葉をさえぎる。改めて若雲は魯連軍夫婦の亀裂の深さを知る。

日曜日、魯連軍はタシルンポ寺へ若雲を連れて行く。ラマ僧に家族の健康を祈ってもらうとき、仏様の前では嘘はつけないと、若雲はついに夫がいることを打ち明ける。魯連軍は驚き寡黙になる。若雲は嘘をついたことを詫び、事情を話す。魯連軍は中隊長ともなると部隊を離れられないことが起きて、帰省がのびのびになっているだけだと慰める。

夫からの連絡を待つうちに、若雲は一週間近く招待所に滞在していた。やっと夫の部隊から電報が届く。夫は病気でラサの病院に入院していた。泣き出す若雲。すぐ退院できると慰める魯連軍に、若雲は夫のために泣いているのではないと言う。魯連軍に強く惹かれていたのである。彼との別れがつらくなったのだ。若雲は滞在中に靴下を魯連軍のために編んでいた。靴下の礼を言って握手を求める魯連軍。しっかりと握られた手はしばらくそのまま放されることがなく、緊迫した時間が流れる。しかし、結局何事も起きないまま、魯連軍と若雲は招待所と団本部との間を行ったり来たりしている。別れがたい二人を冬の夜空の大きな月が皓々と照らしている。

②「寂寞高原」

主人公程暁潔はチベット高原に駐屯する軍の女医だ。北京に夫の柳明と一人娘の小西を残して単身赴任している。3歳になる娘は、休暇で帰ってきた母親がわからず人見知りし程暁潔は傷つく。やっと慣れた頃には一週間の休暇が終わり、またチベットへもどらねばならない。子どもに会えない寂しさから情緒が不安定になり、手紙しか夫との絆がないような気がして、少しでも手紙が遅れると極度の不安に駆られる。

その日、病院の政治処幹事呉冕がやってきて、女性軍人を取材したいという女性記者の取材に協力して欲しいと言った。手術を控えていたので、時間の許す限りということで応じる。記者と話をしているうちに、程暁潔は離れている子どもや夫のことが思われ泣き出してしまう。今ではチベットに来たことを後悔している。だが、もはやチベットから北京へもどれる見込みはほとんどない。というのも同僚の趙婦長が今年の除隊候補者で、一度に同じ部署から出ることはできなかった。しかも十年間チベットに勤務していなければ、そのチャンスもめぐってこなかった。

夫からの手紙で娘が病気のとき、夫は仕事でついていてやれず、お手伝いの王秀英がついていてくれたことを知る。程暁潔は自分ひとりが疎外されているように思い、夫と秀英の仲を邪推する。それが夢にまでてきて苦しむ。

そんな程暁潔を温かい目で見守る男性がいた。それが呉冕である。彼は成都に妻子を残して来ている。程暁潔の名前を肩書きなしで呼び、親しげに振舞おうとする。そんな呉冕を程暁潔は少し鬱陶しく思い、また彼との付き合いは深入りしてはいけないと本能的に感じていた。

週末、呉冕は程暁潔を夕食に誘う。彼は手料理をご馳走し、楽しい週末を過ごそうとするが、話題は自然に今年除隊できるのは誰かということになる。順当にいっても、程暁潔までまわってくるのにあと三年かかるとわかったとき、彼女は泣き出す。そして呉冕に今の悩みを話し、意見を求める。呉冕は柳明が模範的な夫で、程暁潔を愛しているのは確かなのだから、疑いを持つなんてもってのほかだとたしなめる。男は男の肩を持つとなじる程暁潔に呉冕は怒り出し、妻として母親としてどれほどの責任を果たしているのか、それを考えたら帰宅したとき夫が慰めてくれないといって責めたり、秀英との仲を疑ったりするのは間違っている。ちょっと慰めてもらえないぐらいで、君たち夫婦の仲は壊れてしまうものなのかと程暁潔を叱りつける。程暁潔は、自分たち夫婦はそんなに脆くはないと反論しているうちに、次第に夫への不満が消えていく。

翌朝、夫への手紙を書いて送金し、元気を取り戻した程暁潔は、リンゴを干して夫と娘の好物の干しリンゴを作った。

③「伝説」

チベットというところは、極端な現象が見られ、しばしば珍しいことが起きる。それは自然だけでなく人にも当てはまり、チベットに入った人間は平常ではいられなくなる。

軍の広報担当の夏天は、軍事学校の同級生だった宋鉄軍に取材にいくことになる。宋鉄軍の妻が遠く山東省の済南から成都まで列車で、成都からは陸路ヒッチハイクでチベットへ夫を訪ねてくるというのだ。これぞ軍人の妻の鏡とばかりに、夏天の上司は取材を命じた。夏天が訪ねていくと、宋鉄軍は妻がチベットに向かっていることなど全く知らず、子どもも小さいのでいぶかしく思う。その晩、取材を離れて、二人は恋愛や結婚について語り明かす。宋鉄軍は初恋の女性との結婚を親の反対によりあきらめ、今の妻と結婚したことを話した。忘れたと思っていたのに、帰省を終えて帰る列車のとある停車駅で、その女性と会ったとたん、以前の感情が再燃した。今の妻と別れてでも彼女との結婚をと考えたと夏天に話す。彼女は一度は結婚したものの、宋鉄軍を忘れられずに離婚していたからだ。しかし、チベットに帰って来て宋鉄軍は我に帰り、あの高揚した気分は一時の気の迷いで

あると自分を納得させる。その後、その女性から手紙がきても、封も開けずに取ってある。封を開けて読めば、気持ちがその女性のほうへ向いてしまって、どうしようもなくなることは明らか。そうなることを宋鉄軍は恐れている。

翌日、陸路をヒッチハイクしてきた女性が到着する。動揺する宋鉄軍。悪路のうえ、体調を崩し、やせ細った身で、迎えの兵士に抱きかかえられていた。ベッドに寝かせ、薬を持ってくるように部下に命じた宋鉄軍は、彼女の顔を見て、驚きの声をあげる。なんと妻ではなくてその女性は、あの初恋の相手であったのだ。彼女はたった一つの事を聞きたいために、苦難の道のりをやって来ていた。「私を愛している？」宋鉄軍はその問いにはっきりと君を愛していると答える。

軍人の妻の鏡とたたえる記事を期待していた夏天の上司も駆けつけるが、事態を知って頭を抱える。しかし最後には、その女性の愛情の強さ深さに感動を覚え、上司も眼を赤くするのであった。

3．作品から読み取れること

この三つの作品のうち、前の二つが扱っているのは、軍に勤める者の単身赴任から生じた夫婦間の感情の行き違いと、その中で生まれた恋心である。

「天天都有大月亮」の二人は出会ったとき、それぞれの夫婦の間にすでに亀裂が生じており、寂しさと孤独感を抱いていた。その二人の波長がぴたりと合う一瞬が訪れたのだ。道ならぬ恋である事はわかっている。チベットに18年いる魯連軍は、もはや離れがたいほどその土地にひきつけられている。だからたとえその恋が実っても、魯連軍がチベットから離れられないことも想像できる。それに若雲は普通の暮らしを望んでいる。だから二人は一線を越えることなく別れることになる。その曖昧なぼやけたような結末が、何も新しいものを生み出さないので、何か起こることを期待していると、やや物足りなさを感じるかもしれない。だが、裘山山はそれでよしとしている。その後のことは描かない。男女間の感情のもつれなど、人間のどろどろとした面は、ほかの作品にもあまり描かれることはない。

チベットと北京。遠く離れているために家族との絆に確証がもてなくて、ひどく悩んでいるのが「寂寞高原」の程暁潔である。チベットの高原の雄大な自然は人の存在を飲み込んでしまう。あまりにも静か過ぎて、そこにいる人間の感情などというものは全く無いに等しい。底なしの沼のような寂しさに耐えかねて自分の感情をコントロールできなくなり、パニックに陥ってしまうのだ。

そのとき呉冕の存在が彼女を支えている。ここにも主人公を見守る温かな目がある。そして呉冕は程暁潔に好意を抱いているが、だからといってどうするわけでもない。「天天都

有大月亮」のように緊張の一瞬という場面はあるのだが、やはり何も起きることはない。好意をもっているからこそ相手を大事にする。そんな男性が時に作品に登場する。これも裘山山作品の特徴といえるかもしれない。

夫柳明はやはり程暁潔に帰ってきて欲しいと思っている。夫に手紙でいつ戻って来られるのかと聞かれるたびに、程暁潔は悩みを深くする。だがそのことについて夫と話し合っている場面は直接出てこない。あくまでも程暁潔が一人悩む姿が描かれる。

呉冕が叱ってくれたことで、程暁潔は自分の迷いを吹き飛ばすことができた。呉冕の思いやりに感謝している。吹っ切れた彼女からは物憂さが消え、潑剌とした明るさを取り戻している。単純といえば単純ではあるが、物事をそんなに深刻に考えすぎず、気の持ちようでうまくいくものならば、信じるものを信じる方がいいではないか。最後の場面の程暁潔はそう考えていたのではいだろうか。

「伝説」は、日常ありえないようなことがチベットというところでは起こるものだという前書きで始まる。日常起こりえないこと、それが陸路チベットまで苦難の道のりを越えて、しかもヒッチハイクで愛する人に会いに行こうというのだ。確かに普通にはありえないことである。それほどまでに強い愛情を女性が持っているということを描きたかったのか。いやむしろ宋鉄軍の感情の移り変わりを描くことが主であろう。

本当に好きな人とは親の反対で結婚できなかった。今の妻とは手紙で母親の体の調子や子どものことは話すが、肝心の夫婦間に感情のやり取りというものが存在していない。お互いに無味乾燥な状態である。その妻がわざわざ苦難の道をたどって来るのだと思ったから驚いた。さらに宋鉄軍は初恋の女性との事が知られてはと、彼女からの手紙の束を燃やそうとする。かなり動揺している。そして、妻でないことを知ったときのいっそうの驚き。しかし一途に向かってきたその女性の愛情に、宋鉄軍は誠実に答える。現在の妻に対しては誠実とは言えない、宋鉄軍の中にも一途な思いがある。そのあとの事はやはり書かれないのだがこの恋は発展しそうな趣を感じさせて終わるのだ。

人情や思いやりといった、人と人との気持ちの上でのつながりが、最近希薄になりつつある。そんな中で、裘山山のこういった作品を読むと、私は安堵感を覚える。そして気持ちが前向きになるような気がする。それは作品の中にいわゆるえげつない事をする人物が出てこないからかもしれない。

裘山山は基本的に人を信じている。ちょっとした事でくじけたり迷ったりするけれども、本来善なるもの。そう考えているのではないか。

人間の感情はもっと複雑で、裘山山の描くものは表面的だという批判もあろう。だが、この読後感のさわやかさが裘山山の取り得の一つだと言えよう。

今後、裘山山の作品がどうなっていくのか、注目していくつもりである。